

令和 6 年 5 月 17 日現在

機関番号：10101

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2023

課題番号：18K00775

研究課題名（和文）多文化クラスにおけるリンガフランカとしての英語（ELF）の構築

研究課題名（英文）Developing English as a Lingua Franca (ELF) in multicultural classrooms

研究代表者

山田 悦子（Yamada, Etsuko）

北海道大学・メディア・コミュニケーション研究院・准教授

研究者番号：70600659

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,400,000円

研究成果の概要（和文）：日本の大学の学部生と留学生が共に学ぶ英語での多文化クラスにおいて、特に日本の学部生が、留学生に比べて英語でコミュニケーションができていない傾向について、改善する方策を探究することを目的とした。この傾向の原因は、英語スピーキングスキルやコミュニケーションストラテジーよりも、心理的な言語障壁であると判明してきた。リンガフランカのコミュニケーションでは、母語話者や言語能力の高い非母語話者が積極的に言語調整行動を行うことが重要で、この側面を教育に含める必要がある。また、単言語空間よりも多言語要素のある空間のほうが心理的な障壁が軽減され、結果的にリンガフランカ英語の使用も促進されるという示唆が得られた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

大学の国際化の取り組みの多くには、英語による授業の推進が含まれ、日本を含む非英語圏国において課題となっている。留学生も多く履修するこのような授業において、一部の非母語話者が英語でのコミュニケーションにうまく参加できていないという問題は、従来から指摘されている。当研究では、母語話者と非母語話者の平等性を根底にした「リンガフランカとしての英語（ELF）」の概念を応用すること、それに加え、英語のスキルの改善よりも、多言語要素のある空間により、心理障壁の問題を軽減することの重要性を認識した。当研究成果が、日本だけでなく類似の課題がある他国でも、英語による授業の運営に重要な示唆となることを期待する。

研究成果の概要（英文）：This study investigated how to improve the lack of communication among Japanese undergraduate students in multicultural classes where Japanese and international students study together in English. It found that the causes were not only English language skills or communication strategies, but also psychological barriers to speaking in a foreign language. It is also important in lingua franca communication that native speakers and non-native speakers with high levels of proficiency use accommodation strategies, and this dimension needs to be included in education. Instead of a monolingual space, a multilingual space would reduce the psychological barrier and promote the use of English as a lingua franca.

研究分野：異文化間教育

キーワード：リンガフランカとしての英語 ELF 多文化クラス 国際共修 留学生 英語による授業 EMI

1. 研究開始当初の背景

日本の大学のみならず、現在の世界各国の高等教育の国際化の政策として、「英語による授業 (EMI: English-medium instruction)」は、強化されている。日本の大学の場合は、日本語を未習、あるいは初級、中級レベルで来日した留学生が英語による履修ができ、日本の学生にとっては、国内にいながら英語を使う機会として、英語による EMI 授業の機会は貴重である。

本研究では、日本の大学の学部生と留学生が共に学ぶ、英語による国際共修型の多文化クラスを対象とし、英語による EMI 授業の問題点のうちの一つと考えられる、非母語話者、特に日本の学部生が英語でのコミュニケーションにうまく参加できていない傾向を改善するための方策を探究することを課題とした。これは、本研究に先行する研究代表者の科研費研究「基盤研究 (C) 多文化クラスにおけるクリティカルシンキング育成のためのシラバス構築 (15K02626)」で、同内容の英語使用のクラスと日本語使用のクラスの比較の結果から、課題として浮かびあがってきたもので、本研究で中心テーマとして探究することにした。

2. 研究の目的

グローバル化が進む国際社会において、共通語として機能している英語の規範は、もはや、英国や米国の母語話者だけではなく、非母語話者を含めた英語の使用である。両者を平等に位置づける「リンガフランクカとしての英語 (ELF: English as a Lingua Franca)」を中心に据えた教育を展開するのに、英語による多文化クラスは、最適であると考えられた。よって、母語話者、非母語話者の両者を含む空間で ELF の実践スキルを扱い、非母語話者、特に日本の学生が、英語でのコミュニケーションに意味のある参加ができるようにする要素を解明し、大学の授業英語化への提言へと広げるといった目的を据えた。

3. 研究の方法

日本の学部生と留学生が共に学ぶ英語による多文化クラス(90分授業×15回)において、1) コミュニケーションストラテジー(確認や繰り返し、強調など)を扱い、2) 毎回、小グループでの討論でそれらを実践する。また、ELF の概念形成に至るまでの「World Englishes」や「International English」の概念についても扱った。

次の段階の授業実践では、心理障壁を軽減する方法を模索し、その中の一つとして、場面を限定して、日本語による活動を導入し、日本語力の高くない留学生も参加できる「やさしい日本語」を活用した部分的バイリンガル化を取り入れた。

データは計5つのクラスの授業実践から収集し、分析対象とした。所属機関の許可を得た研究倫理手続きの説明後、研究参加への同意の得られた履修者より、上記の授業実践から以下の3種類のデータを収集した。

毎授業後の振り返り
学期末の最終レポート
フォローアップ・インタビュー

これらのデータは、質的データ分析ソフトを用いて分析し、コード化した。

4. 研究成果

(1) 授業実践

研究開始当初は ELF の概念に基づき、母語話者も非母語話者も ELF 空間では平等な話者であること、言語調整は、母語話者や言語スキルの高い非母語話者が中心となって行うべきであること、コミュニケーションストラテジーを用いることを教育に含め、一定の効力は認識できたと理解している。しかし、話者によって実行度の差があること、またこれらの効能については、当初に考えていたよりは限定的で検証も難しいことが判明した。また、ELF であっても共通語が一つである限りは、母語話者、非母語話者という立ち位置自体は変わらず、話者の平等性を徹底することが難しいこともあることを実感した。

次の段階の授業実践では、心理障壁の軽減のため、日英の二言語を使用するバイリンガル授業、複数言語が入り混じった状態で使用されるトランスランゲージングを検討したが、授業の課題や討論での意思疎通の達成を考えると、どちらも現実的ではなかった。結局は、場面を限定して、日本語力の高くない留学生も参加できる「やさしい日本語」を活用した部分的バイリンガル化を

取り入れ、これに関しては心理障壁の軽減と共に、特に日本の学生にとっては、母語である日本語を客観的に意識することが、「伝わりやすい英語」を意識することにつながった。

(2) 論文と学会発表を通じた研究成果の発信

当研究から得られた成果は、論文と学会発表を通じて発信した。6報の論文(うち3報は査読ありで、そのうち1報はWeb of Science収録の国際論文誌)、7件の学会発表(うち5件は国際学会)を発表した。このうちの一部は、当研究に先行する科研費研究「多文化クラスにおけるクリティカルシンキング育成のためのシラバス構築(15K02626)」、後続の科研費研究「多文化クラスにおける複言語主義アプローチの開発(21K00645)」が、共に多文化クラスを基盤とした研究であるため、最大で2つの科研費研究の成果としての重複があるものを含む。先行する科研費研究においては、英語によるクラスと日本語によるクラスを比較した実証研究を含み、日本語によるクラスで、日本語母語話者による言語調整がうまく運んだという結果から、特に母語話者や言語運用力の高い非母語話者による言語調整が重要であるという示唆も得た。

(3) 次期の科研費研究への発展

このような国際共修型の多文化クラスでは、特に留学生の背景からもたらされる多様性を、障害と捉えるのではなく、むしろ資源として活用でき、共通語を一つに絞ることよりも利点があると考えられた。当研究からは、非母語話者の「心理障壁の軽減」が課題として再確認され、ELF空間に多言語要素が加わることにより、「心理障壁の軽減」につながると考えられた。この示唆は、後続の科研費研究「多文化クラスにおける複言語主義アプローチの開発(21K00645)」でさらに探究することとなった。

(4) 派生的教育、研究(英語学習法)への発展

当研究からは、日本の学部生が英語学習の自律的継続において、知っておくべきことが示唆され、英語学習法のコースでも導入した。特に、英語学習の目標としての英米のネイティブスピーカーは大半の日本の学部生にとって現実的ではなく、「リングフランカとしての英語(ELF)」とはどのような英語かを理解し、ELFで明確に伝えることができるようになることを目標とすることが重要であることに関し、当研究からの示唆を活かすことができた(McCrohan, G., Thronton, K. & Yamada, E. (2023) 参照)。

以上を総括すると、英語によるEMI授業では、「リングフランカとしての英語(ELF)」の概念やコミュニケーションストラテジーの導入と共に、「心理障壁の軽減」の工夫により、どのような話者も平等に活発に参加できる空間を作ることが、非常に重要であるという示唆を得た。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 Yamada Etsuko	4. 巻 10
2. 論文標題 Investigating the roles of first language (L1) speakers in lingua franca communication in multicultural classrooms: a case study of Japanese as a Lingua Franca (JLF)	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Journal of English as a Lingua Franca	6. 最初と最後の頁 285～311
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1515/jelf-2021-2057	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 山田悦子	4. 巻 74
2. 論文標題 「やさしい日本語」による市民との交流を取り入れた多文化クラスの活動	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 メディア・コミュニケーション研究	6. 最初と最後の頁 45-57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Yamada, Etsuko	4. 巻 1
2. 論文標題 留学生と日本の学生が共に学ぶ多文化クラスにおけるリンガ・フランカの構築	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 The 25th Princeton Japanese Pedagogy Forum Proceedings	6. 最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 山田悦子	4. 巻 26
2. 論文標題 多文化クラスにおける日本の学生の言語行動：使用言語の異なるクラスの比較から	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 高等教育ジャーナルー高等教育と生涯学習ー	6. 最初と最後の頁 11-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14943/J.HighEdu.26.11	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 5件）

1. 発表者名 Yamada, Etsuko
2. 発表標題 Plurilingual Approach in a Multicultural Classroom
3. 学会等名 The European Conference on Language Learning (ECLL 2022)(University College London) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Yamada, Etsuko
2. 発表標題 Learning from L2 speakers of Japanese: the effect on Japanese students' English learning
3. 学会等名 JASAL Forum at JALT 2022 48th Annual Conference on Language Teaching and Learning
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Yamada, Etsuko
2. 発表標題 Raising the students' awareness of English as a Lingua Franca: Pedagogical implications from multicultural classrooms
3. 学会等名 Sixth International Language in Focus Conference Language, Research and Teaching in the 21st Century, Importanne Resort Dubrovnik, Croatia (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山田 悦子
2. 発表標題 留学生と日本の学生が共に学ぶ多文化クラスにおけるリンガ・フランカの構築
3. 学会等名 第25回 プリンストン日本語教育フォーラム (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yamada, Etsuko
2. 発表標題 The Shift of the Positions between Native Speaker Roles and Non-native Speaker Roles in Multicultural Classrooms
3. 学会等名 11th International Conference of English as a Lingua Franca (King's College London) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Yamada, Etsuko
2. 発表標題 The Role of Native Speakers in Lingua Franca Communication in Multicultural Classrooms
3. 学会等名 The Eighth CLS International Conference CLaSIC (National University of Singapore) (国際学会)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 A Multicultural Community in Niseko and its Language Issues	開催年 2019年～2019年
---	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------